

波多野培根先生と

西南学院

村上寅次

波多野培根先生(明治元年——昭和二十年)

の七十七年の生涯は、三つの時期に区切って考えることができるように思われる。第一期は幼少期から青年期までの、いわば修学時代で、先生が十六才で岩国の陽明学者東沢瀉の塾に学び、後同志社普通学部において新島襄の指導を受け、同志社を卒業するまで。第二期はさらにこれを前後期に分け、その前期は同志社予備校の教師として母校にとどまること数年の後、「大ニ感ズル所アリ、伝道ノ決心ヲ起シ」東北、北海道の各地に伝道と教育に従事する十四年(これはいわば先生の「遍歴時代」)、その後期は再び同志社に帰り(明治三十七年)、普通学校の学頭として母校の

ためにその教育的情熱を傾注する十四年(大正七年一月同志社を去る)。そして第三期は、ここに述べようとする西南学院在任の時代であって、大正九年九月、先生五十三才の時にはじまる。先生の西南在任は昭和十九年三月末まで、二十三年七ヵ月の永きにわたる。辞任後京都に帰られ、一年の後、昭和二十年十一月七日逝去された。

第二期の同志社時代が先生の壮年血気充実の時代とするならば、第三期は沈静と達観の時代であったといえよう。この時、先生が何故に同志社を去られたかについて述べることは私の領分ではない。それはやがて来るべき同志社百年史の關係する問題であらう。とに

かく、西南学院は日本キリスト教々育史にその名を記さるべき優れた教育者をこの時、同志社から譲り受けたのである。

*

さて、ここで西南学院について一言述べなければならぬ。アメリカ南部バプテスト教会から派遣された宣教師チャールズ・K・ドージャーは、明治四十年來日、福岡市を中心として九州伝道に従事していたが、日本の伝道にはキリスト教による教育が伴わなければならないことを確信し、福岡に男子の中等学校を設立することを企図し、そのことを熱心に外国伝道局本部に訴えた。その熱意はついに本部の支援を決定せしめ、大正五年四月、

中学西南学院として実現を見るに至った。位置は福岡市の西郊、博多湾に臨む百道松原の一角、白砂青松の地であった。(ちなみに、西南学院は今年五月、創立五十年記念式を挙げ、これを祝した。)大正十年にはその第一回卒業生を出すとともに、これを受けいれる上級学校として当時の専門学校令による西南学院高等学部(四年制、英文科・商科)を開設した。波多野先生が西南学院に迎えられたのは、この高等学部開設の前年九月のことであつた。

先生がバプテスト教会とのかかわりを持ったのは、明治三十四年四月から一年間、仙台においてまだ創立後日の浅かったバプテスト派の尚綱女学校(現在の尚綱女学院)を応援したことにはじまる。このことはやがて、後に先生が同志社を辞任されたとき、再びバプテスト教会と関係を持つ機縁となり、当時西部バプテスト組合(現在の日本バプテスト連盟)が文書伝道のために下関に開いていた福音書館の活動を援けることとなったのである。こうして先生は大正八年秋、下関鹽ノ浦に五十二日間を過した。やがて福音書館の主任者ワーン博士を通じて、その親友であつた

西南学院院长C・K・ドージャー氏の招きを受けるに至つたのである。こうして先生の福岡における生活はじまつたのである。

* ー

しかし、先生は一家をあげて福岡に移られたのではなかつた。御家族は京都に残されたままで、单身、寮の一室に学生とともに生活し、春夏秋冬の休暇に入ると先生は早速御家族とともに生活するために福岡を発たれるのであつた。福岡における生活はこのようにして二十三年間続いたのである。

筆者も昭和六年から数年間、学生としての学寮において先生の生活に身近に触れる機会を持ったのであるが、先生の日常は実に簡素で規律正しいものであつた。それは私たちに、かのケーニッヒスベルグにおける哲人カントの生活を連想させるものがあつた。毎朝、七時には学生と共に食堂において朝食、八時には登校、夕方帰寮、夜は十二時まで読書。日曜日には福岡バプテスト教会の朝礼拜に出席、午後は散歩、あるいは古本屋めぐり。しかも、先生は在任中、一度もいわゆる役職の他位につけなかつた。そしてそのことは先生の信念にもとづくものであつたと想像され

る。昭和二年、ドージャー院長は先生に高等学部長就任を懇請したが先生はそれを固辞して受けられなかつた。学校行政管理の責任をもつことについては、先生は既にその関心を失つていた。その意味では西南における生活は先生にとっては余生であつたのではなからうか。しかし、今から考えるとそのことは先生にとつても、学校にとつてもよいことであつた。何故なら、先生はその規律ある生活の全部を、研究と教育のためにふり向けることができたからである。

先生の担当の学科は、キリスト教倫理、西洋哲学史、ドイツ語などであつたが、とくに英文科の学生のために先生が好んで選んだ思想家はトマス・カーライルであつた。先生逝去の年(昭和二十年)某氏宛の書翰において先生自ら當時を回想して、『西南学院に於て十年以上「サター・リザータス」(衣裳哲学)を学生と共に講読せし時代は、教育者としての小生の生活中、最も楽しき時代に属し、此の喜ばしき追憶は終生忘るるの期なかるべしと存じ候』と記しておられる。

しかし学生の側から見た先生は、また他の教師と一見して異なる異色ある存在として目

にうつった。先生は生涯洋服を着用せず、いつも羽織、袴の和服生活であって寡黙端然とした態度であつたので、学生には何かしら近づき難いものを感じさせていたようであるが、それでも先生の学問と人格を畏敬する学生が何人かはあつた。彼らはおそろおそろ先生の室を訪ねて、信仰につき、人生につき、時局につき、先生の意見をうかがつた。そういう時、先生はいつもあたたかく迎え入れ、静かではあるが、とどまることのない熱弁をもって何時間も語り続けられた。傾聴する学生たちは辞去する機会を失って、いつもびれた脚をさすつたことであつた。

*

しかし、役職にもつかないこのような自由な教師としての生活のなかで、先生自ら進んでその任務を引き受けられた一つのことがある。それはチャプル集会の運営指導であつた。現在では、それは宗教主任の仕事の一部にあたるものであろうが、先生はこの仕事をキリスト教主義学校の基本的立場に立つて特に重視されていたように思われる。そのことは、昭和十一年に書き残された覚書のなかで、「予が十六年間勤続中、聊か西南学院のため

に尽したりと思う点」として、①学問 ②信仰 ③国民精神 ④学院の秩序維持 の四つをあげ、その②の信仰の項に、「聖書本位の福音的キリスト教宣布、チャプル集会、キリスト教主義教育の高調」と記していることによつても知ることができる。現在、西南の資料室に先生が書き残されたチャプル講話担当表十箇年分が保存されているが、そのなかには先生自ら時機に応じて十分に準備された講演ともいふべきものを行っている。そして、これはキリスト教教育者としての自覚に立つ先生の重要な教育活動の一つであつた。記録によつてそのいくつかをひろつて見れば、昭和三年十月三十一日、十一月一日、七日の三回にわたつて、「徳川光圀公三百年紀」、昭和七年十一月十六、十七日「瑞典王グスタフ・アドルフ二世記念」、昭和十年十一月二十九日「同志社に就て」（同志社創立六十年記念日）などである。

*

先生は、西南学院在任中も母校同志社の発展に深く心を寄せておられたことは、同志社中「知る人ぞ知る」ところであらう。先生が昭和十五年の新島先生永眠五十年記念日のた



左より 村田竹治郎、末光信三、波多野培根、牧野虎次、鈴木吉満、野村仁作、前窪勝之助の諸氏

めに著した雄渾の美文「新島先生の生涯の意義」一篇は、そのまま同志社を離れながら、同志社を忘れることのできなかった一校友の母校愛の結果として受けとることが出来る。福岡にありながら、先生は同志社の動向と同志社人の動静については実に詳しく知っておられた。そのことは日誌によって明らかである。先生が福岡にあってこの同志社への愛着の情を分ち合ったのは、同志社出身で当時福岡高等学校教授であった赤井直吉氏であった。私たちはよく校庭の松林の中を、語り合いながら歩いている二人の老学者の姿を見かけたのであった。

*

しかし、先生の西南学院在任の後半、とくに昭和十年から昭和十九年までの時期は、日本の国家にとって歴史的激動の時代であるとともに、国家の運命に深い連帯感をもつこの老教育者にとっても、黙視することのできない狂風怒濤の時代となった。とくに、新島襄直伝のキリスト教精神に立つ愛国教育の理想は先生の胸中になお生きていた。戦時下の日本の教育が文部省の指導の下に、偏狭な独善的愛国教育に傾いていったとき、先生の道義

的歴史観に立つ愛国教育はこれと対立せざるを得なかった。こうして学校内外における先生の時局批判的言表はようやく警察当局の注目するところとなつていった。そのような情勢のなかで、昭和十九年六月三日、西南学院精神文化研究所発会式における先生の記念講演、「キリストと愛国」は、七十六年の生涯をキリスト教主義教育に捧げつくりした一教育者の切々たる愛国の熱言であった。

先生の記録によれば、この講演の題は最初「キリストの愛国」となっていた。その題名が示すように、そのモチーフは聖書に基づいてキリストの愛国、その母国イスラエルに對する愛国の特徴を詳述することによって、間接にこれに適合しない愛国を批判することにあつた。「義は国を高くし、罪は民を辱しむ」（箴言十四章三十四節）が先生が主題聖句として選ばれたものであった。そして二種の愛国すなわち「自己の国家の利益のみを考えて他国を顧みない本能的愛国と、正義人道を標準とする道義的愛国」とを比較し、後者のみが国家を永遠の安泰におくものであることを論じた。

この講演の数日後、先生はその速記原稿に

全面的に加筆して小冊子として刊行し、全国キリスト教主義学校のみならず、文部大臣、宮内大臣その他文教の要路にある人々に配布することを企図された。しかし、これはついに実現を見るに至らなかった。

*

最後に私事にわたって恐縮であるが、どうしても忘れ得ない一事がある。昭和十九年七月末の某夜、私は二度目の召集を受け、南方に出征する数日前のことであった。休暇をもらって自宅に帰る途中、偶然福岡の市内電車の中で波多野先生におめにかかった。いよいよお別れの挨拶を申しあげ電車を降りようとする、先生は立つて降り口まで送ってこられ、「命を大切にするように。君たちにはまだこれからしなければならぬことがあるのだから」といわれた。それが生前、先生におめにかかった最後であった。

私は波多野先生を思い出す度に、自ら襟を正させられる思いがするのは、先生のキリスト教々育者としての姿勢ということである。私はこの一事だけでも、西南学院において波多野培根先生に出合い得たことを深く神に感謝している。

（西南学院大学教授）